

探訪 北の風景 ①

世界有数のマガン中継地 美唄市・宮島沼

青木和弘

沼に浮かぶ無数のマガンが「キヤクア、キヤクア」とかん高く鳴き交わしている。突如、水をつけたたましい羽音を立てて滑空し一斉に舞い上がる。旋回しながら高度を上げ、はるか上空で編隊を組んで餌場に飛び立つ。

美唄市の西端にある宮島沼は、面積約30ヘクタール、平均水深1.7mの浅く小さな沼だが、ここに東アジアに生息するマガンの約半数に及ぶ7万羽以上が集結する。世界有数の中継地である。ここで栄養を蓄え、春は4000キロも離れた繁殖地の極東シベリアへ向かう。秋は宮城県の栗

原市と登米市にまたがる伊豆沼など、南の越冬地を目指す。2002年、国内で13番目のラムサール条約登録湿地（現在国内46カ所、道内は13カ所）となり、よく知られるようになった。

マガンがやって来るのは年に2回。4月中旬から5月初旬と、9月下旬から10月中旬で、夜明け直前にエサ場へ飛び立つ「ねぐら立ち」と、日没前の空が色づくころの「ねぐら入り」の情景が壮观だ。春の見頃は朝4時半ごろと夕方17時半ごろ、秋は朝5時ごろと夕方16時半ごろだ。

実は、1971年の飛来数は1500羽ほどに過ぎなかった。マガンが保護鳥に指定され、銃猟が禁止されてから飛来数が増え、91年に3万羽を超え、現在は7万3000羽を数える。だが、飛来数はここに来て頭打ちだという。宮島沼水鳥・湿地センターの牛山克巳博士（39）によると、宮島沼の収容力や、エサの落穂が残る水田面積などの制約を受けるからだ。

マガンが増えたことで、減反政策で始めた小麦の新芽が食い荒らされる農業被害が深刻になり、保護が駆除かという感情的な対立も起きた。現在、周辺農家では収穫直前の田んぼに秋まき小麦の種を撒き、春に代替えのエサ場にするなどの対策を講じている。



「ふゆみずたんぼ」の田植えをする田んぼオーナーたち

水田の減少で、湿原の乾燥化が進み、宮島沼が縮小しているという。また、化学肥料などによる水質の富栄養化で生態系の破壊もある。

用水など圃場整備と一体になった施策が必要だが、ここに草の根の取り組みがある。冬も水田に水を張る「ふゆみずたんぼ」という無農薬・減農薬の農法で、乾燥化や水質の改善に効果があるという。ここでは冬季に用水が確保できないため、雪解け後、2週間ぐらい早く水田に水を張り、1カ月以上貯めて雑草の芽が出てから耕して駆除し、それから田植えをしている。公募の田んぼオーナー制度で、田植えから収穫まで体験する仕組みだが、農家全体にこの農法を広めるには、割高に



極東シベリアへの渡りに備えて宮島沼に集結したマガンの群れ（写真はいずれも宮島沼水鳥・湿地センター提供）



毎年市民が参加し秋に開催する宮島沼カントリーフェス。「食と農と自然」をテーマにした農業祭で、旬の野菜の軽トラ市やラムサール湿地の食品市、農家の奥さま食堂、ドジョウのつかみどりなどで盛り上がる

なる無農薬米の販路獲得など、まだまだ課題が残るといふ。水質改善のため、沼の浚渫（しゅんせつ）と浚渫土の活用の研究も始まっている。

地元の小学3年生から大学生までが参加する、宮島沼の自然を守る「自然戦隊マガレンジャー」も活発に活動している。メンバーは現在18人で、4月26日〜27日に開催する「子ども湿地交流会in宮島沼」をプロデュースし、全国のラムサール条約登録地に参加を呼びかけている。

貴重な湿地の恵みを、農業、観光、教育など、人間生活に利用する「ワイズユース（賢明な利用）」の挑戦が、マガンの舞う絶景の下で繰り広げられている。